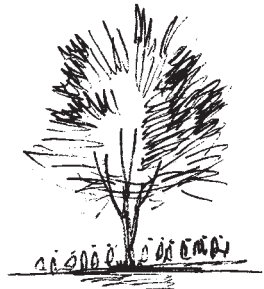
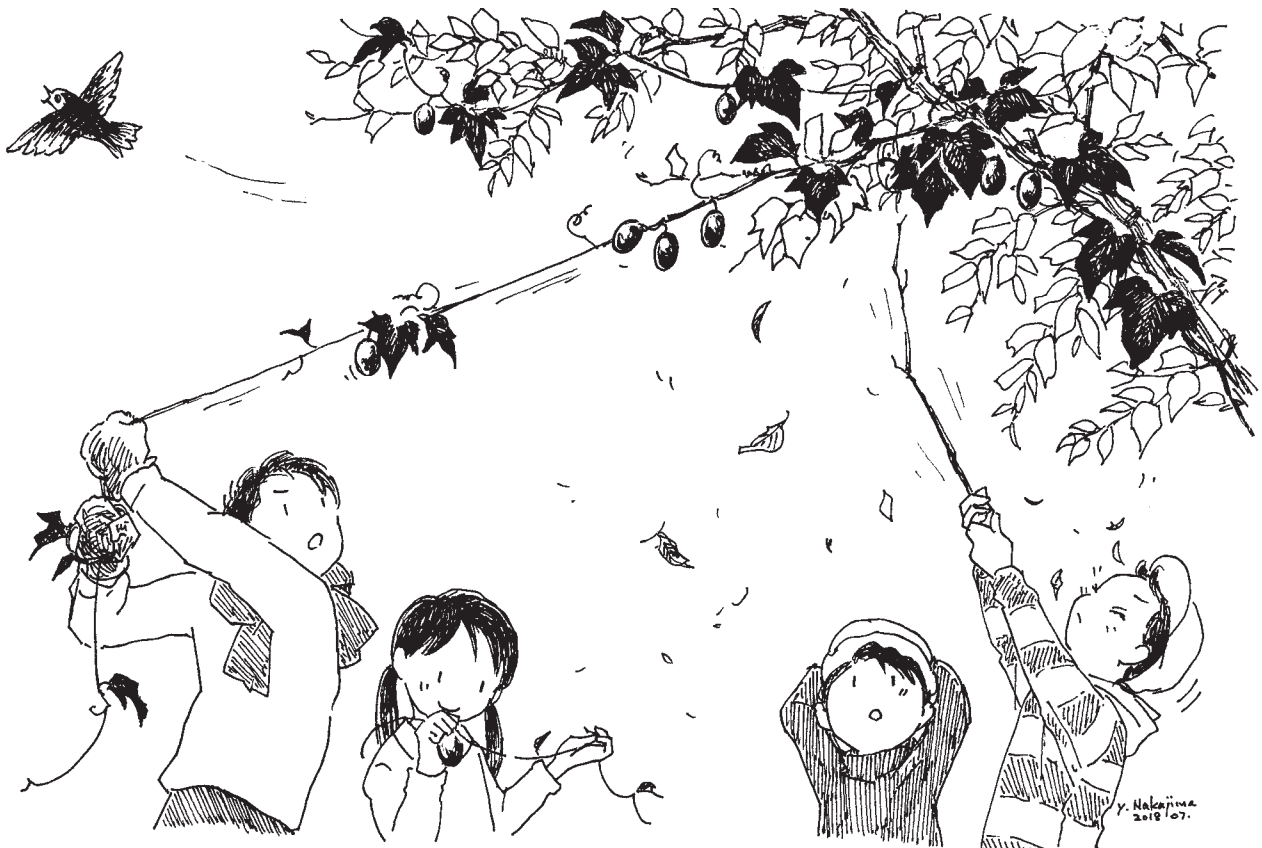


光の子



No.186 2018.8.20

●年間聖句 一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。
(ヨハネによる福音書12章24節より)



「からすうり」

表紙絵・中島由起子

「余花明かり」

海見えて山の喝采余花明かり

海沿ひの山路の崖の余花明かり

郭公を仰ぎて長寿授かりぬ

月夜野を過ぎたり鮎の一夜干し

一も二もなくて山蛭たかりけり

万緑に寄るや鼯鼠の神に寄る

草笛を吹いて未来を志す

落合 水尾

(「浮野」主宰)

原点としての「隣る人」

映画監督 刀川 和也

私が「光の子どもの家」と出会って、関わり始めてから15年。「光の子どもの家」の暮らしを描いたドキュメンタリー映画「隣る人」を完成し、公開したのは9年目のこと。それから6

話があり、去る6月2日から2週間、4年ぶりに上映していた。ただ、4年ぶりに上映していただくことになったのです。ただ、上映するだけではもったいないと、連日トークイベントを開催することにしました。トークゲ

年の歳月が過ぎようとしていきます。この間、全国の映画館と40ヶ所に及ぶ自主上映会において7万人もの方々に本作を観ていただくことができた。そんな折、最初に「隣る人」を公開した映画館「ポレポレ東中野」(東京)さんからリバイバル上映の

ストには、さまざまなかたちで「隣る人」を応援してください。私が受けた「隣る人」の贈り物」と題して、思う存分語っていただくことになりました。私は1回のみ聞き手を担当することになりました。お話を聞かせていただいたのは、フリーピン・マニラで、ストリートで暮らしていたような貧困層の青少年をスタッフとして育て、レストランを経営している、中村八千代さん(1969年生まれ)です。中村さんは「国境なき医師団」の日本事務所スタッフを経て、「国境なき子どもたち」のスタッフに。貧困層の子どもたちの支援のためフィリピンへ。イラク人難民支援のためにヨルダンへ赴任。退職後、マニラへ戻り、今度は個人で「ユニカセ」という名前のレストランを創業した、という面白い経歴の方です。中村さんがフィリピンに戻ったのは、最初に赴任したとき、自分が直接関わった子どもたちのなかに命を絶つたり、殺されたりする子どもたちを見てきたからだ、といいます。そのなかでも「ユニカセ」創業のきっかけになったのは、生活・教育支援を始めたばかりの、出

会ってから一週間しか経っていません。中村さんが、スーパードマトソースを盗んで、警備員に射殺されてしまったことだった、というのです。「仕事で収入を得ていれば盗みをしなくて済んだんではないか……」。

創業から8年。数々の困難があったといいます。遅刻や無断欠勤は当たり前。途中で投げ出すねて消えてしまったり、お金をやって中村さんの前を通り過ぎていった子どもたちは100人を超える。中村さんもやめてしまおうと思ったことは数知れず。そんななか、はじめから1人だけ残って頑張ってくれていた女の子がいました。閉店後、この子とふたりで午前1時まで皿洗いをしていたこともあったと。「彼女がいてくれる限りやめられない」と踏ん張ったと中村さんはいいます。いまは、この女の子(といってもいまでは20代半ば)と料理を担当する男性も加わり、この2人の、それぞれの子どものうち2家族とともに、血のつながりではない、同じ屋根の下で暮らすひとつの大きな生活共同体II家族として、協力しながら、中村さんはレストランを続けています。

「隣る人」を観た後、中村さんはこんなことを語ってくれました。

「上映中、涙を堪えられませんでした。親を失う辛さ、ストリートに子どもを抱きしめてあげられない葛藤、血のつながり以外の関係構築……。私が今やっていることの原点のような映画でした」

埼玉の片隅で営まれている「光の子どもの家」での暮らしは、マニラの片隅の厳しい環境のなかで試行錯誤を繰り返しながら、なんとか今日を凌ぎ、子どもたちとの生活の基盤を築いていこうとする中村さんの日々の格闘にダイレクトにつながり、自分の原点を、国境を越えて感じ取ってもらえたのだと思います。

ポレポレ東中野での2週間の上映では130人を超えるひとたちに劇場まで足を運んでいただくことができました。公開から6年経った今でも「隣る人」にはひとびとの心をうつなにかがあるのです。この映画を作った私にとっても同じこと。映画づくりにおいても、自分の人生において「隣る人」は、私のなかにも存在しています。

看取り考(3) 人は生きてように死んでいくのか?

老健施設みゆきの丘施設長 仙道 富太郎

私が老健施設みゆきの丘にお世話になって6年が過ぎた。かなりの数の方がみゆきの丘で亡くなっていた。容態変化を起こし、急死したごくわずかの人たちを除けば、皆さん看取り対応で亡くなっている。「人は生きてように死んでいく」と言われている。私は、亡くなっていた方々がどのような生を営んで来たかを理解できるほど、その方々と付き合っ

ては来なかった。その言われていて、その言に賛否を申し上げることが出来ない。が、死にゆくさまは人の生きさまと同様千差万別である。

多くの方は年齢90歳を超しており、言わばローソクの火が燃え尽きるときのように、静かに世を去るが、死にゆく様は一人ひとり異なっている。生きること

に執着を示した人には出会っていないが、死期に及んでなお生命のほとばしりを見せる方にお目にかかったことはある。

他に考えられる理由がなく、いわば自然に食が細くなつていき、食事が全くできなくなつた時、経管栄養をするか、看取り対応にするかを決めなければならぬ。看取りになった時の医師の対応が問題になる。いわゆる「点滴」をするか否かである。看取りについて本を出している医師の多くは、点滴をしない。点滴をすると、死期に臨んでいる人たちが、かえって苦しむという。飢えや脱水はエンドルフィンの分泌を促し、精神的には安らかな死に至るといふ。

死期の点滴に関する科学的なデータがいかほどのものかは私には分からないが、ほとんどの家族がそれを希望することもあり、私はこのような場合は点滴をすることにしている。もちろん家族が望んだとしても、患者の害になることを医師はしてはならないと思うが、一般的に点滴が害になるとは思えず、少なくとも水と電解質の補給にはなると思うからである。しかし、代謝が衰えている体に過量の水分を与えて、むくみを増した

り、心臓の負担を増大させたりしてはいけないので、常識的な補液の量から見れば、かなり少量の水分補給であり、むくみが見られるような場合には、点滴は体に良くないからと家族に説明して中止する。

一人の100歳の女性が、経口摂取できなくなり、毎日わずか250ccの補液を続けた。約3週間眠り続けた。と、3週間経つたとき、目を開けて何やら話すしぐさをした。私には分からなかったが、看護師長が、口元に耳を近づけ聞き返した。看護師長曰く「先生、この人、ご飯食べた」と言っている。20ccの注射器に御粥を詰めて、口元にもつていって少しづつ流し込んでやると、口を動かして御粥を飲み込んだ。心なしか、おいしそうに見えた。目を開けたのはその時だけで、後はまた眠り込んだ。そして、一週後に亡くなった。3週間何を思い続けて、何を夢見て生き続けたのか、知る由もないが、目を開けて「ご飯食べたい」と言い放つた言葉から連想される3週間の世界は、死の直前の暗いそれでは決まらなかっただろう。お釈迦様が待つ、蓮の花咲く美しい世界を、彼女は死ぬ前にもう味わっていたのかもしれない。

たのかもしれない。気の毒としか言いようのない死に方もある。末期のがんなのだが、認知症の随伴症状から入院先で点滴を抜去するなど治療に抵抗し、ありていに言えば、病院を追い出されてしまった。農繁期の農家で育てる家族も居ない。家族に泣かれた当施設のケアマネージャーの一人が、「見てもらえない」と言い、入所許可となつた。私が危惧したのは、がんに伴う痛みがひどくなつたらどうしようかということであつた。幸い近くに開業している内科医が緩和ケアをしており、痛みのコントロールのため往診を頼むことが出来た。家族には、そんなに長くないことを伝えた。ところが、内科医に往診してもらおう機会も待たず、彼は当施設に入所3日目に他界した。

認知症の人たちは、いったいどこで安らかに死ぬことが出来るというのか。



「共育ちカンガルー日記」

(49) 子供神輿

近藤みちる

毎年7月の最初の日曜は、地区を挙げての夏祭が盛大に催される。町内一とも言われる自慢の大神輿が町を練り歩く様は圧巻で、そこにわれわれ子ども会が、2基の子供神輿と太鼓花車で花を添える。

今年は私も子ども会役員として、夏祭の運営陣に加わった。役員にとつては最もハードな行事と言われている夏祭だが、子ども達はみな夏祭が大好きで、参加率は毎年ほぼ100パーセントという、子ども会切つての目玉行事となっている。

夏祭での役員の任務は、子供神輿と花車を無事に巡行させることである。子供神輿については、最初の大掃除から宮出し、祭当日の飾り付けまで、神輿会の手ほどきを受けて役員も関わることになっている。御神輿をこれほど間近で見たり触れたりするのは初めてで、子供神輿と言っても、細部まで実に繊細に作り込まれた相当に高価なものだということは、素人目に見てもわかった。輿世話役と

呼ばれる神輿会の重鎮の一人が、子供神輿の作られた経緯を私達に話してくれた。

以前、大神輿の修理のために、地区の人達に寄付を募ったところ、修理代を遥かに上回る額の寄付が集まったという。そこで子ども達のために、どこにも負けない立派な子供神輿を作つてやろうということになり、大神輿の修理を手掛けた浅草の神輿職人に頼んで、2基の子供神輿を作つてもらつたというのである。2基は赤神輿、青神輿の名で地域の中で愛され、大神輿と共に今日まで大切に受け継がれてきたのだという。

花車にしてもまた然りで、毎年公民館で子ども達に太鼓を教えてくれているのも、木組みの花車を組立てて子ども達を乗せ、地区を隈なく巡行してくれているのも、日頃太鼓を大切に管理してくれているのも、全て地区の有志の方々である。

役員になるまで考えたこともなかったが、子ども達がこうして、毎年当たり前のように子供神輿を

担ぎ、花車で太鼓を叩くことができるのは、実は多くの地域の人たちのこうした尽力があるからこそで、それがどれほど尊いことなのかを私は思い知つたのである。子供神輿に込められた地域の人たちの思いや願いをしっかりと受け取り、子ども達に、そして次なる担い手達に伝えていくことこそが、子ども会役員の責務なのかもしれない。

迎えた夏祭当日は、朝から夏空の広がる暑い一日になった。子ども達ははつぴやダボに身を包み、この日のためにピカピカに磨き上げられた子供神輿に、みな胸躍らせているようだった。

わたしや中丸 いそべの子ども波もあらけりや 気もあらいなんだ こらしよ

威勢のよい甚句と共に、いよいよ子供神輿の出発である。

「わっしょい！わっしょい！」子ども達の元気な掛け声と賑やかな鈴の音を聞いて、沿道に出てくるたくさんの人達。みな毎年同じ場所、子供神輿を楽しみに待っているのだという。

坂道やカーブに差し掛かり、神輿の体勢が傾くと、沿道から力強い声援や拍手が挙がる。

「頑張れ！」「いいぞ！」「もう

少し！」

それに応えるかのように、子ども達が一層大きな掛け声を挙げ、神輿の体勢を立て直す。

地域の人達と子ども達とのそんなやり取りが、私には微笑ましくもあり、心温かくもあり、「子どもは地域の宝」という言葉が、ここではこんな形でしっかりと息づいているのだと思つた。これもまた、役員をやつて初めて知つたことの一つだった。

少子高齢化や社会構造の急激な変化が、地域の繋がりを希薄にしていると言われる昨今、全国的に子ども会の会員数は減少の一途をたどり、その存在意義までもが問われ始めていると聞く。だがそんな時代だからこそ、子ども達とつて地域はより身近なものであつて欲しいと私は願う。その意味で、子ども会が地域の中で果たすべき役割は、まだまだあるのではないかと私には思えてならない。言い換えれば、そこに確かな存在意義を見出し、いかにして子ども達と地域を繋ぐ懸け橋になり得るかだろうか、これからの私たちが親世代に課せられた、大きな課題なのかもしれない。

飛行機に子供神輿の傾ぎけり

みちる

音楽？デッサン？

彫刻家 中島 睦雄

知り合いのTさんから、珍しい録音を聞かせてもらった。Tさんは、地域の混声合唱団に入っている数少ない男性である。

この合唱団は、まもなく予定されている地域の合唱コンサートに出演することになって

いるので、出演前の練習の様子

が録音されているものであった。Tさんは、

この録音を持ち帰って、家でも練習するということがあった。

指導の先生は、細かい指導を確認し、自分のものにして、本番でボロを出さないようにという心がけである。

録音された内容を聞いてみると、指導の先生は、非常に細かい点にも心くばりをしておられ、「この所は、もう少し高く」とか、「その所は、少しテンポを速く」とか。

第三者の私には、全く思いもよらないものであったが、本番を前にしての練習だけに、大変細かいところまで指導されるので「なるほど」と思わせられるものがあつた。

ステージの上で合唱をするのに、一人だけでも外れた声を出していたのでは、ブチコワシになってしまう。

従って、楽譜を全て頭に入れておかなければならないだろう。この事は、まさに、音楽に於ける基礎中の基礎と言つても良いものだろう。

そして、本番のステージでは、楽譜なしで、指導の先生の指揮により、先生の表情や、囁くような部分、或いは感情の高まりなど、指揮者に従つて音楽を表現するのであろう。これは、メンバーの一人一人の、しっかりとした基礎の上に立つて輝くものであろう。考えてみれば、それは当然だったのである。

ひるがえつて、美術の世界ではどうだろうと思うと、作品制作にあたっては、やはり、基礎的な力を身につけておく必要がある。個性を發揮するには、その表現者の基礎的な力が、どうしても必要であるから。

その、基礎的な力については、最初は石膏デッサンというものをやるのが普通である。

石膏デッサンというのは、一般的には、石膏でできた古典的な名作をデッサンするのである。古代ギリシア、古代ローマ等の名作を、例えば「ミロのビーナス」とか「ブルータス」とか、そのほかいろいろの名作を、木炭や鉛筆で描写し、着色はしない。

木炭とは、朴や桐などを焼いて作った細かい炭で、これを使うことによつて微妙な明暗などを表現するのである。

ここでは、個性だ個性だとは言つていられない。物体の、しかも名作の構造を、そしてそれらの美しさを学び、表現する技法だからである。

従つて、形は正確であるか、比例関係はまちがっていないか、立体感はどうか、光と影は、といった事項が幾つもあつて、「あ、その音程は違いますね」「少しテンポを速めて」等と同じような部分があるようである。

勿論、絵を描くのに、この石膏デッサンが必要不可欠なものであるとは言えない。別な方法で基礎的な力をつけることな

ど、いくらでもあるのだから。たまたま、手許に「安井曾太郎素描集」というのがある。デッサン集である。

加須市樋遣川生まれで、フランスに留学し、帰国後日本の美術界に大きな衝撃を与えた斎藤与里先生の少し後にフランスに留学した安井もアカデミー・ジュリアンに入り、ジャン・ポール・ローレンスの指導を受けた。

ここでのデッサンコンクールで、何度も賞を受けたという安井の、留学中の素晴らしい人体像などのデッサン作品の中に、石膏像の首を描いたものがある。

勿論、水彩画、油彩画等に素晴らしい作品を残した人であるが、やはり、この画家にとつてはデッサンの修業が大きな基礎になつていたのである。

従つて、個性、個性という前に、「その所はもう少し高く」とか「その所は少しテンポを速く」と、合唱指導をされた先生の言葉を、デッサンに置き換えたような、細かい配慮の上に描かれる必要があるのである。



夏休みを迎えて 仙道家

6才で入所してきた正宗は、当初、母の話題になると「あの人は俺んちに住んでるらしいよ。」と発言し、私を絶句させました。それから月1回程度の面会を重ねて1年。今では「お母さんと暮らしたい。」と言うこともあるようになりました。

一方、「俺は光（の子どもの家）で大人になる。小西さんの（職員宿舎の）隣の部屋に住んでそこから仕事に通う。」と宣言している小学生もいます。

どの子の一言も重たい一言です。彼らのまっすぐな思いに私たちの願いを乗せて、「家族」「家」がクローズアップされる夏休みを楽しみつつ乗り切っていきたいと思えます。

岩崎 まり子

久し振りだね、慎太郎 佐藤家

光の子どもの家では、毎年夏休みに入る際に食事会をします。今年5月に家庭復帰した慎太郎が参加してくれました。前にもご家族と一緒に来訪してくれたことがありましたが、その時よりも顔つ

きや体つきがお兄さんになっていて、とてもうれしくなりました。

ここにいた当時からアイドル的な存在だったので、多くの子ども達が駆け寄り「慎太郎??可愛い」と言っていました。ご家族の方によると、慎太郎自ら「行きたい」と言ってくれたようですが、さすがにどの子も記憶に残っているわけではなく、少し緊張した様子もありました。それでも皆から声を掛けられ、食事をしていくうちにとっても素敵な笑顔を見せてくれ、やがて、もともと同じ家に住んだ忠太郎とも会場内を走り回っていました。

家族の元へ戻ることができたあとも、こちらに顔を出してくれたのはとてもうれしいものです。ご家族や子どもに会う事で、新たな生活を一つ一つ積み重ねられている事がひしひしと伝わってきました。何より、ご家族の方々から「親戚のようなものですか」「また来ますね」と言っていただけ、繋がりを持ち続けて頂けることに感謝したいと思います。

田口 貴子

17歳の仁と私 原田家

7月某日、高校時代に所属していた演劇部のOB会で大変懐かしいものを発見しました。部員が1日ごと順番にその日の部活の出来事、感じたことや口では言えないことなどを書く交換日誌です。他の部員がそれに対して書き込みをする、今ならばLINEのグループのような役割を果たしていたものでした。

表紙を見るまで存在をすっかり忘れていましたが、中に高校2年生の私が書いた日誌がありました。17歳の私の文章は稚拙で、様々なことがうまくいかずに悩みもがいている様子が下手くそな文字で綴られていました。懐かしくもあり気恥ずかしい気持ちになりましたが、あの頃の私に出会えたようです。

それから数日後、17歳の仁とふたり、2日間奥日光の山歩きに出かけました。今までグループでの宿泊行事には何度か出かけましたが、ふたりで泊まりに出かけるのは初めてです。仁を山に誘った理由は、うまくいかない毎日の中で心のリフレッシュができるように

期待したからです。

山歩きには少し自信がありました。仁のペースで歩くと息が上がり、50過ぎのオヤジと17歳の少年の体力の差を思い知らされました。楽しそうに山を登る仁の背中を追いかけ、所々で感動している様子を見ると連れて来た甲斐があったと感じました。17歳の時、生きる方向性が見えていないのは私も私も同じ。ひとりだけで戦っていたと勘違いしていたあの頃、たくさんの人が支えてくれたことを改めて思いなおしました。仁にも、みんながあなたのことを支えていると伝えていきたい。17歳の私の大きな違いは仁のほうが純粹であること。

穴水 祐介

母の日のメッセージ 倉澤家

5月、母の日。他職員や母の日で集まってくれていた卒園生に促されて、倉澤家の子ども4人も母の日の夕食会の席に参加。職員が準備した花束を担当者に……というひと幕がありました。もちろんありがたいことなのですが、グループホームメンバーにはやらされ

ている感があり、私は担当者ではあるけど母親ではないのだから、気が乗らないのであればスルーしてもらってかまわないのに……と少しいじけながら思っていました。

夕食も終わり、来てくれていた卒園生を見送り、部屋で携帯を確認すると、今年度から倉澤家に加わった高校1年生の瑠璃から、『HAPPY MOTHERS DAY』とカーネーションの絵に『THANK YOU MAMA』が添えられたLINEのメッセージが届いていました。

まったく予期していなかった出来事にびっくり！ そしてとても感動！

彼女とは、これまでほとんど接点が無く、倉澤家によってくる前はほとんど話をしたこともありませんでした。私が勝手に描いていた彼女のイメージは、おとなしく無口な秀才タイプの子だったのですが、実はかなりのおしゃべり。口ぐせは「なぞ！」、歌好き、アニメおたく(?)、そしてオヤジギャグ好きということがわかって来ました。これからも私の知らない姿が見られるかもしれません。高校生になつてから初めて担当するのは、担当者にとっても子どもにとっても難しいこともありま

すが、彼女が卒園してからも「たださい。」と言ってもらえる家に、担当者になりたいと思つていきます。

倉澤 智子

はじめまして 牧野家

私は今年光の子どもの家にやってきました。牧野さんをはじめ、先輩職員のアドバイスを耳を傾けながら、子どもたちと関わってきたいと思えます。

3年生の美樹は、私によくちょっかいをかけてきます。4年生の日向は大人びた時と、年相応の時のギャップがあります。二人とたくさん話をして、遊べたらと思います。中学1年生の千暁とは、フアッションのことなど雑談の中で距離が縮まりました。高校2年生の伊織は、大変な時もあります。周りの人を気に掛けてくれる優しさも持ち合わせています。高校3年生の真由子は、アルバイトを頑張っています。応援し、時々声をかけ、彼女が話したいときは、耳を傾けていきたいです。皆それぞれ長所があるので、これから見守っていききたいです。

山本 ゆかり

食堂と園庭から

私の光の子どもの家でのほたら

きは、5軒あるどこの家にも属さないフリーな立場。子どもたちが帰ってきてからは、屋内で広く使える食堂や、園庭で子どもたちと関わる人が多い。最近では私の「おかえり」にも子どもたちは「たさい。」と返してくれる。

食堂でおやつを食べながら「今日は学校で○○したよ」「今日は幼稚園で○○があつたんだあ」と何気ない会話をします。たまに「今日は幼稚園で何してきたの?」とこちらから聞くと、「黒川さんには教えないっ!」とそっぽを向く顔。敢えて「そっか。じゃあ聞かないね」と言うと「今日は幼稚園でダンスしたよ」「歌を歌ったよ」と話してくれる。そんなやりとりが小憎たらしくも、かわいくも思える。

ある日、園庭で菜々が浮かぬ顔をしていた。担当の遠藤さんが公休で、隣の家でかわいがつてくれる祐子さんも、用事でお出かけ……泣きじゃくる菜々を宥めて祐子さんの乗る車を見送ることはできたが、出発して10分も経たないうちに「今日は遠藤さんいない……。祐子さんも出かけちゃった。寂しい」「遠藤さんまだ帰ってこないかな?」「用事終わってないのかな?」とどんよりした顔で語る。普段、子ども同士のトラ

ブルで思う通りにいかない時の演技泣きとは違う様子だった。

丁度園庭に出ている子どもも少なく、園庭を見られる職員が他にもいたので、菜々の気分転換と小学校の下校の様子見を兼ねて、一緒にドライブに行くことにした。

小学生の通学路を走り、子どもたちの間で見ると良いことがあると言われている「ゴールデンスペーシア」も見ることができた。上機嫌になってきたところで帰ろう、と丁字路を左折しようとした時だった。なんと遠藤さんが車でその丁字路を横切つたではないか!しかも車は光の子どもの家方面に向かっている。菜々もすかさず「遠藤さんだ!!遠藤さん今日は休みだけど早めに戻ってきてくれたんだあ!」「おうちに帰ろう!」ドライブを終え、急ぎ足で原田家の玄関を開けた菜々。しかし、迎えてくれた岩瀬さんに「遠藤さんは今日は帰らないんだって」と言われ、うれしげな顔が一変する。

結局、菜々はその日の夕方を笑顔で終わらせることができなかつた。それでも、明朝はきつといい顔で目覚めたに違いない。隣にいる遠藤さんの顔を見つけて――。

黒川 健一郎

無慈悲な、非人間的な

理事長 菅原 哲男

6月、東京で5歳の女の子が、激しい虐待を受けて亡くなり、義父と実母が保護責任者遺棄容疑で逮捕された、と報じられた。

この事件は多くの人々の心を締め付け揺さぶり、記憶は未だ鮮明である。多くの報道は、義父と実母の非人間性や残虐性を指摘し、女の子がかわいそうという論調であった。

しかし、私やあなたはこんな無慈悲な、非人間的な行為とは関わりがないとでもいえるのだろうか。

女の子が書き残した大学ノートには
 もうパパとママにいわれなくてもしつかりとじぶんからきょうよりもっともつとあしたはできるようにするから もうおねがい ゆるして ゆるしてください おねがいします

ほんとうにもうおなじことはしません ゆるして

きのうぜんぜんできてなかったこと これまでまいにちやってきたことをなおします

これまでどれだけあほみたいにあそんでいたか あそぶってあほみたいなことやめるのも もうぜったいぜったいやらないからね ぜったいぜったいやくそくします

と書かれていたという。
 5歳の子どもの発想がこんなことばを自分のものとするのではないだろう。ともかく怖くて力のある親たちから身体的・心理的な暴力を受け続けていたのだと考えられる。

しかし、私はこの文面から、私たち施設職員の子どもの関わりに思いが至った。
 女の子が書いたような反省に満ちた文を、私も子どもたちに書かせたことがあったのである。子どもの成長に関わると言うことは出来ることを増やして

いくことだと思いきんでいた頃のことである。鉄は熱いうちに打てとばかりに、当然受けるべき訓練は出来るだけ早いうちに施すべきと考えたのであった。

そのような古い記憶を思い出してしまつと、5歳の子どもにひらがなをほとんど読み書きできるように迫つたと報じられてもいるかの親たちが、本当に残酷な例外的な、通常と言われる人々とは違う人間なのだろうか と、疑わしく思える。

這えば立て、立てば歩めの親心と言ひ習わされてきた我が国の子育てと重なる部分も否定できないのではないか。

私はこのはたらきに関わつて50年が過ぎた。人様の産んだ子どもを、その人に代わつて育てるなどと言う身の程知らずなはたらきをライフワークに選ぶなど、向こう見ずで傲慢な選択をしたものだと思ひながら、今更やめるわけにもいかないでいる。

幸運にも報道の女の子のような結果にはならなかったが、何とも多くの子どもたちに、残酷な伝え方をし、短慮のうちに関わることをしてきただろう。今となつては、関わつたあまたの子どもたちに許しを請いな

がら、新たな関わりを続けるほか途はない。
 子どもは生まれてすぐには何も出来ない。だから泣いたり笑つたりしながら愛くるしく親などの心を引きつけてやまない。そんなことを繰り返して愛着を主軸にした関係がつけられ生涯にわたつて強固で特別な関係になつていくものだろう。

ところで、一家は1月に香川県から転居している。香川県でも虐待事案が少なくとも2回あったと引き継ぎがなされていたが、都の児童相談所は危険性が高くないと考えていたという。

このような連携のまずさについても関心が集まり、埼玉県でも児童相談所と警察が虐待に疑いがある事例について全件情報共有しようとする動きがある。子ども最善の利益を図るために諸機関が協力するのは当然だが、一方で情報を共有することによつて子どもに不利益が生じるようなことがあつてはならないだろう。
 加えて、報道には外からの移住者に無関心な都会の問題も取り上げ、啓蒙していく役割も期待したい。

現場から

暑サニモマケズ

遠藤 恵里香

うだるような暑さが続いています。皆さまいかがお過ごしでしょうか。

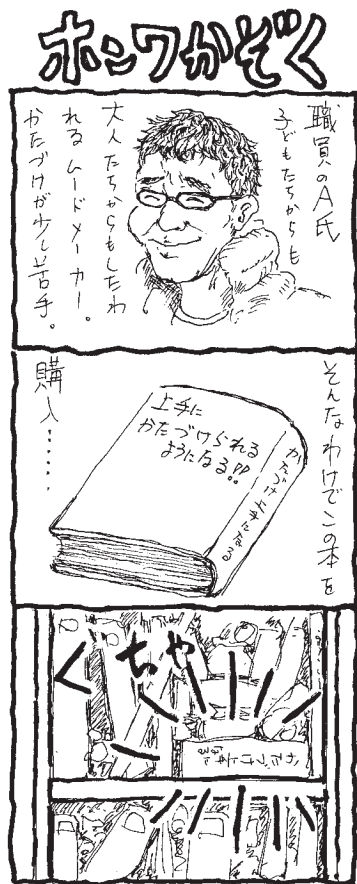
光の子どもの家には、暑さに負けず元気に過ごしている子がいます。

小学3年生の凜は好奇心旺盛で、学校の帰り道に道草を食ってくるのがお決まりのパターンです。帰りの時間が遅くなり、私に「もっと早く帰ってきなさい！」と注意されることがしばしば。凜の道草への情熱はこの記録的な猛暑にも打ち勝ち、ただでさえ片道30分はかかる通学路を1時間以上かけて帰ってくるのです。顔を真っ赤にしながら笑顔で帰宅した凜を見て、（よくこの暑さの中道草できる

な……。）と心の中で感心している私が居ました。もちろんこの後こつびどく注意しましたか……。

宿題とおやつを済ませた凜は、あれだけ道草を食っていたにも関わらず、「外遊びに行ってきたーす！」とよく通る声で宣言し、園庭に出て行くのです。凜のエネルギーはいつたいたどこから湧いてくるのだろうと不思議に思いつつも、無邪気に遊んでいる凜を見守っています。

中学1年生になり、サッカー部へ入部した楓は、毎日ヘトヘトになって帰ってきています。ただでさえ暑さに弱く、体力も



十分についていけない楓にとって、この猛暑の中の練習は想像を絶するものでしょう。家に帰ってくるのは6時過ぎで、夕食途中に帰ってくるのがほとんどです。楓は自分の荷物を2階の自室に置いておくこともできず、玄関先に荷物を置いたまま、だるそうに背もたれにもたれかかり、ゆっくりと夕食をとっています。疲れている様子は見受けられませんが、7時30分から1時間程度、中学生対象に行っている学習会には渋々参加し、課題に取り組んでいます。学習会が終わり、部屋に戻るとそのまま寝てしまうことが続いています。

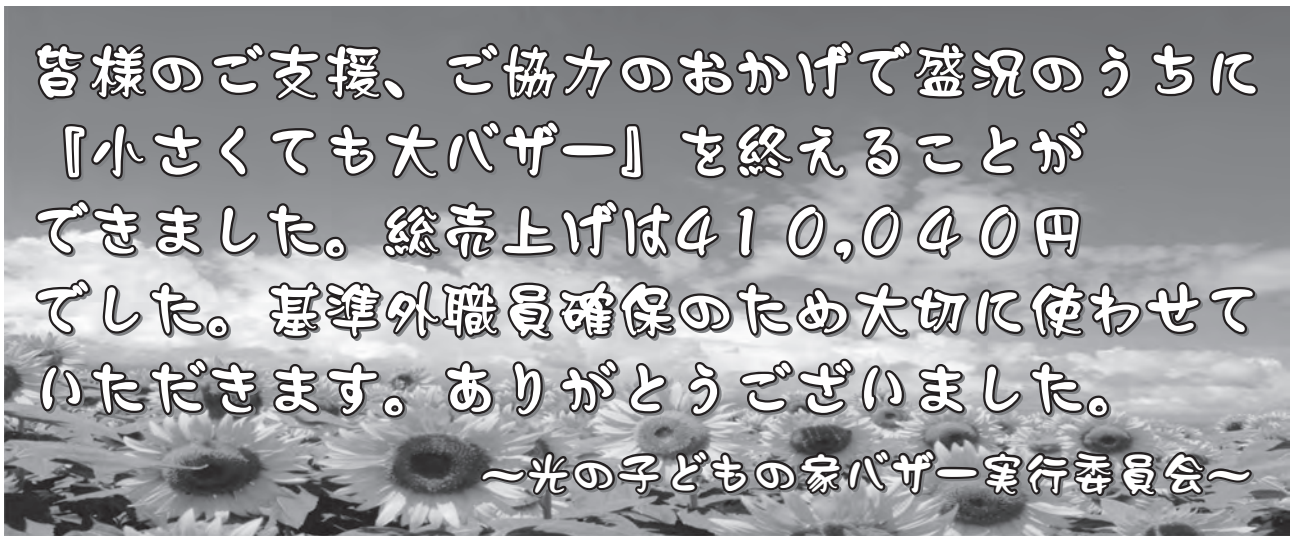
楓が寝落ちした際、玄関先に置きっぱなしにしていた荷物を部屋に持っていくこうとして、そのバッグの重量に驚いたことがあります。最近の学校は「置き勉強禁止」で、中学生のバッグの重量が10キロになることもあるといわれています。楓のバッグはまさに10キロはあろうかという重量でした。それに加え、体操着入れも持って毎日登下校していると思うと、それだけでも疲れてしまうなと思いました。もちろん、登下校の間には授業と部

活動もこなしているのですから、楓は学校でエネルギーをほぼ使い果たしてくるのだろうと思います。家では無気力で、私もついグチグチと小言を言うてしまいますが、楓にねぎらいの言葉をかけるよう心掛けていきたいと思っています。

そして子どもたちの待ちに待った夏休みに入りました。職員にとつてはついに来てしまった試験の夏休みといった感じがすが、連日の猛暑にも、子どもたちのパワフルさにも負けないよう、元気に過ごしていきたいと思っています。

そして、この夏休みで、子どもたちとたくさん思い出を積み重ね、ともにまた一つ成長していけたらと思います。





日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 = 2018年3月～4月

- 2018年4月現在
 幼児6名 小学生10名 中学生9名 高校生8名 他2名
 計35名
- 3月
 2日 東大宮教会の久保島泰牧師による夕礼拝 感謝
 9日 守谷教会の若月健吾牧師による職員礼拝 感謝
 高校受験合格発表&合格祝い会
 16日 夕礼拝
 19日 3月生まれの誕生会
 21日 イチゴ会
 23日 東埼玉バプテスト教会の木田浩靖牧師による夕礼拝 感謝
 24日 第117回理事会。その後皆で夕食会
 29日 4軒合同で権現堂へ花見
 30日 夕礼拝
 31日 避難訓練
- 4月
 4日 仙道家東武動物公園へ
 5日 進級進学祝い

- 6日 夕礼拝
 13日 東大宮教会の久保島泰牧師のよる夕礼拝 感謝
 20日 夕礼拝&4月生まれの誕生会
 21日 評議員会
 23日 光の子どもの家後援会、しずくの会とのバザー合同打ち合わせ
 27日 守谷教会の若月健吾牧師による職員礼拝 感謝
- <寄贈者各位>
 マルキチ物産 ダスカジャパンクアウトテモック (株)なとり
 セカンドハーベストジャパン 古河農友会 福楽
 吉羽良美 杉山和俊 松本明子 天野登美子
 株式会社西武ライオンズ 金子直子 島野常一 相崎洋子
 根岸亜麗朱 佐藤なお子 松本静江 他多数の皆様
- <ボランティア各位>
 常松洋介 岡本有代 金沢屋幸手さくら店 山田智
 山田裕子 山田義人 向井進 加藤瑠海 他多数の皆様
- ☆夏も真っ最中です。皆様のご健康をお祈りします。(黒川)

////// ————— 反 射 光 ————— //////////////

西日本の豪雨で大変な思いを
 されている方々に心からお見舞
 い申し上げます。厳しい暑さが
 続くなか、皆さまいかがお過ご
 でしょうか▼夏休み直前、小
 学校のプールが中止。中学校の
 部活も大会前を除き7月いっぱい
 中止との連絡が▼私たちも会
 議で夏休みの日課を見直し。幼
 児と小学生は、例年通り園庭の
 組立式プールで水遊び。中学生
 は、冷房の効いた部屋で宿題と
 受験勉強——、だけで1日過ご
 せるはずもなく。学習支援も手
 厚くしたいが充分に果たしてい
 ない現状▼そんな折、イベント
 託児マザーズ様より、学習用ニ
 とタブレット端末をいただく。
 小中学生に1人1台渡せる台
 数。感謝。後日詳細を▼1日中
 子どもが家にいてかわる時間
 が増えたのはよいが、幼児から
 高校生まで揃っていると窮屈そ
 うな姿も▼子どもが自転車を出
 かけられ、大人も安心して送り
 出せるような場所があったな
 ら。施設の中だけでなく、地域
 に遊んだり、学習支援を受けた
 り、ただダラダラできたりす
 る、そんな居場所ができないか
 ▼何もかもがすぐにはかなわな
 いまでも、暮らしを豊かにする
 ためさらに励む夏に。

(義)